2021年 春号 | Issue 73
BIG CIRCLE
日・英 2ヶ国語 無料 季刊誌

大きな輪

O-KINA-WA

気仙沼市
東日本大震災遺構

English conversation class reopened at Camp Schwab

キャンプ・シュワブ英会話クラス再開

Students listen to the English instructor, 2nd Lt. Daisey, in the first English conversation class resumed at Camp Schwab.
キャンプ・シュワブで再開した英会話クラスで、デイジー少尉の話に耳を傾ける受講生＝ 2021年 3月9日、基地内教育センター
(Photo by Ikuhide "Ike" Hirayasu)

もくじ

2　読者の声/お詫びと訂正

3　フォレスト過去号紹介
キャンプ・フォスター&レスター渉外官によるニュースレター

5　応援メッセージ、届け子供たちへ

7　地球の日に向けて
基地高校生環境クラブの取り組み

8　自然愛好家が講話
「浜辺のゴミを住家にするヤドカリ」プロジェクトを高校生と共有

11　3/11東日本大震災追悼

13　海兵隊、真心届ける
コロナ禍の支援施設へ生活必需品を寄付

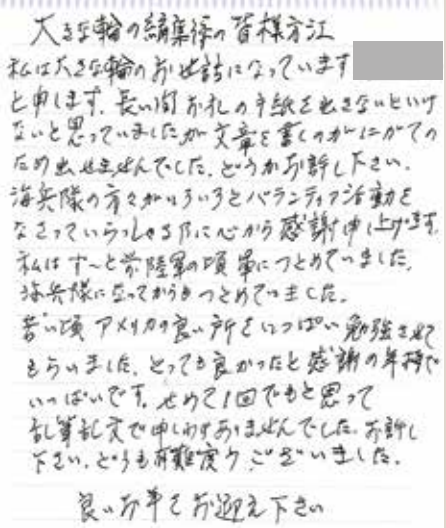
15　運命の導き
第３海兵師団副師団長、空手発祥の地沖縄で絆深める

On the cover

Marine Corps Installations Pacific key leaders, from right, Brig. Gen. William Bowers, MCIPAC commanding general, Col. Neil Owens, assistant chief of staff government and external affairs, Sergeant Major Joy M. Kitashima, pose with students and survivors of the 2011 Great East Japan earthquake and tsunami at the Kesennuma City Great East Japan Earthquake Memorial Museum in Kesennuma, Japan, March 11, 2021.

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館前で、学生や被災者とポーズをとる(右から)米海兵隊太平洋基地司令官ウィリアム・バワーズ准将、政務外交部長ニール・オーウェンズ大佐、バトラー基地ジョイ・M・キタシマ最先任上級曹長
＝2021年3月11日、宮城県気仙沼市
(Photo by Lance Cpl. Alex Fairchild/アレックス・フェアチャイルド兵長)

読者の声 Reader's Voice


大きな輪の編集係の皆様方江

私は大きな輪のお世話になっています

と申します。長い間お礼の手紙を出さないといけないと思っていましたが文章を書くのが苦手のため出せませんでした。どうかお許し下さい。

海兵隊の方々がいろいろとボランティア活動をなさっていらっしゃる事に心から感謝申し上げます。

私は十～と米陸軍の頃長につとめていました。

海兵隊になってからもつとめていました。

昔の頃アメリカの良い所をいっぱい勉強させてもらいました。とっても良かったと感謝の年月でいっぱいです。せめて1回でもと思って

乱筆乱文で申しわけありませんでした。お許し下さい。どうも有難度々ございました。

良いお年をお迎え下さい

Dear Big Circle staff,

Hello, I hope this letter finds you well. For a long time, I thought I should send you a thank-you letter, but I could not because I am not good at writing. I hope you will forgive me. I would like to express my sincere gratitude to the Marines for all the volunteer work they do.

I worked for the military many years ago, with the Army and the Marine Corps. I learned a lot of good things about America during those periods. I am very happy and grateful for that. I apologize for my poor handwriting and bad grammar, but I thought I'd at least give it a try. Please forgive me and thank you very much.

I hope you have a happy new year.

沖縄県在住の方からです。「大きな輪」はこの手紙を昨年12月に受け取りました。前回紙面のスペースの都合上掲載することが出来なかったため、今号で紹介することとなりました。お手紙ありがとうございました。
We received it last December. We appreciate the letter and decided to share with our readers.

お詫びと訂正 Correction

大きな輪（№72）2020年 冬号/2021年 新年号の 12ページの『基地司令官より新年のご挨拶』につきまして、キャンプ・キンザー司令官、オーマー・ランダル大佐の日本語訳末尾の一行が紙面より欠落しておりました。改めて日本語訳全文を以下の通り記載いたします。

この度の不手際につきまして、心よりお詫び申し上げます。

It has come to the attention of the "Big Circle" that the last row of the Japanese translation of Camp Kinser Commander's greeting on "New Year's Greetings from Camp Commander" was missing on page 12 (Winter 2020/New Year 2021). Whole translation is as below.

キャンプ・キンザー司令官、オーマー・ランダル大佐

キャンプキンザーより浦添市、那覇市の皆様、そして琉球列島におられるすべての方々へ新年のお慶びを申し上げます。

キャンプキンザーは素晴らしい近隣地域の皆様へ日頃より感謝の念に堪えません。特に現在のような艱難時にはその思いをより確たるものにします。昨年はこの艱難を乗り越えるべく、皆様方との友好関係をより強固にするため邁進してまいりました。皆様方よりご協力を仰ぎつつ、新型コロナ禍においても数々の地域交流の機会を設けさせていただきました。てだこウォーク、トライアスロン、自転車レース、鎮西演習並びに多くのキャンプ視察、沖縄戦資料館見学やキャンプ概要説明ブリーフィング等を開催してまいりました。地元の皆様方のご理解とご協力を賜り、徹底した公共衛生対策を講じ、これらの開催を実現出来ました旨深く御礼申し上げます。

2021年にあたり皆様方との絆をより固くするために、地元交流をより一層深めたいと存じます。スポーツイベント、英語教室、てだこウォーク、キンザーフレンドシップフェスティバル、クリスマスツリー点灯式、地域清掃活動、森の子児童センター支援、キャンプツアー等を計画しております。

結びに、松本哲治浦添市市長、浦添市役所、浦添警察署、浦添市消防署、浦添商工会議所、浦添市国際交流協会、浦添ロータリークラブ、その他多くの関係者各位の皆様方には地元コニュニティ**ーとキャンプキンザーとのお交わりに於きまして多大なるご尽力をいただき厚く御礼申し上げます。２０２１年も幸多き一年でありますようお祈り申し上げます。**

各基地渉外官へのお問合せ

基地渉外官は、在沖縄米海兵隊各基地と地域社会との架け橋です。各基地の渉外プログラムについては下記までお問合せください。電話でのお問合わせは以下の通り。メールでご連絡される場合は、okinawa.mcbb.fct@usmc.milまで。件名の欄にお問合わせ先のキャンプ名をご記入ください。

シュワブ（名護市）
[交換] 098-970-5555
[内線] 625-2544

ハンセン（金武町）
098-969-4509

コートニー（うるま市）
098-954-9561

フォスター（北谷町・他）
098-970-7766

普天間（宜野湾市）
[交換] 098-970-5555
[内線] 636-2022

キンザー（浦添市）
[交換] 098-970-5555
[内線] 637-1728

大きな輪

〒901-2300
沖縄県北中城村石平
在沖縄米海兵隊基地
BLDG.1, COMMSTRAT (UNIT 35001)
大きな輪 編集係

電話番号: (098) 970-1220
ファックス: (098) 970-3803
メール: **okinawa.mcbb.fct@usmc.mil**

「大きな輪」は、性別・年齢・国籍を問わず、多くの読者の皆様のご意見、ご感想、ご質問をお待ちしております。氏名、住所、電話番号を明記の上、ファクシミリ、メール、または封書にて上記の「大きな輪」編集係までお送りください。

基地内イベント情報は

https://www.japan.marines.mil/Event/

Big Circle was called “Okina Wa” from the first issue in July 2002 to the 15th issue in Spring 2006. We put “O-kina-wa” in the way close to Japanese pronunciation.

大きな輪は2002年7月創刊号から2006年春の第15号まで「Okina Wa」と表記されていましたが、私達は日本語の発音に近い形で「O-kina-wa」とタイトルに示すことにしました。

フォレスト紹介

フォレスト

キャンプ・フォスター＆レスター

フォレスト第4号 1998年発行

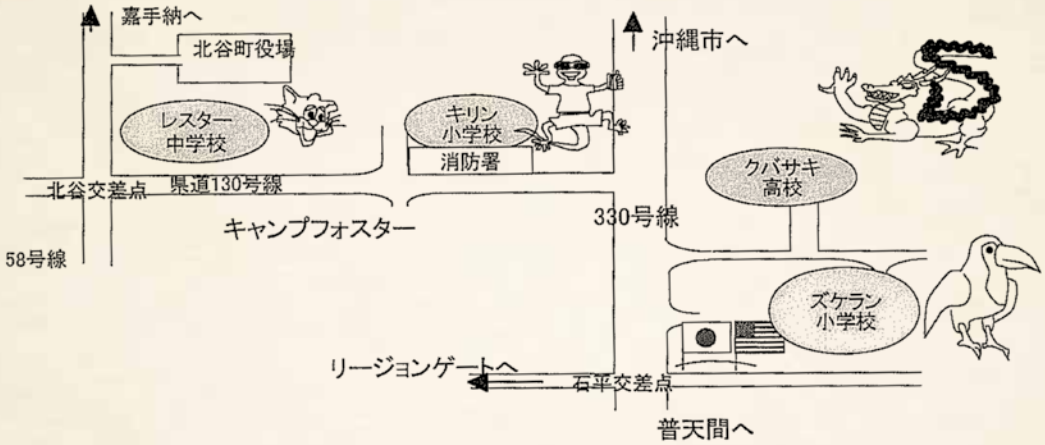
「フォレスト」はキャンプ・フォスター＆レスターの富村浩子基地渉外官によって1998年以来発行されている二か国語のニュースレターです。フォレストは英語ではなく、フォスターとレスターを組み合わせた造語。キャンプ・フォスターとレスター近隣の役所や飲食店に配布されています。「大きな輪」では、過去に発行された基地の中と外の生活様式の違い等を紹介しているこのニュースレターを掘り起こし、取り上げています。

地元の海兵隊基地内の生活をわかりやすく紹介する　No.4

フォスターレスターニュース

- **早いものでもう6月です！** 6月というと、日本人なら梅雨とか、ｼﾞｭｰﾝﾌﾞﾗｲﾄﾞなどを思い浮かべるでしょう。でも、ｱﾒﾘｶﾝｽｸｰﾙでは6月には1学年が終わり、夏休みの後、9月に新学期が始まります。今年の夏休みは6月13日から8月30日まで。また“PCS”といって、軍人・軍属の転勤の時期でもあり、ちょうど日本の3月のように忙しい時期です。PCSとは勤務地変更のこと。

- ｷｬﾝﾌﾟﾌｫｽﾀｰとﾚｽﾀｰには小学校が2校、中学校が1校、高校が1校の合計4校があります。（下図参照）日本の学校に校章があるように、ｱﾒﾘｶﾝｽｸｰﾙにはそれぞれのﾏｽｺｯﾄがあります。例えば、ｽﾞｹﾗﾝ小は大きな黄色いくちばしを持つ鳥、ｷﾘﾝ小はﾄｶｹﾞ、ﾚｽﾀｰ中は猫、ｸﾊﾞｻｷ高はﾄﾞﾗｺﾞﾝなど。また、各学校には日本人の先生が平均2名おり、日本語や日本文化を教えています。



- **アメリカンスクールに制服が!?** 本当の話で、ﾚｽﾀｰ中が来学年度から制服を採用します。制服はｶｰｷ（茶色がかった薄黄色）又はﾈｲﾋﾞｰﾌﾞﾙｰのｽﾞﾎﾞﾝ及びｽｶｰﾄに水色又は白のﾎﾟﾛｼｬﾂを着用、としています。しかし、制服を着ない選択も可能で、学校に文書で“制服を着たくありません。”という旨を伝えれば良いだけ。自由の国らしいですね。（今年から那覇市内の高校が私服制度を導入した事実からすると日本の学校と全く逆の傾向ではないでしょうか！）ﾚｽﾀｰ中のﾀﾞｲｱﾝ ﾍﾞﾙ校長先生によると、制服導入の理由は生徒を勉強に集中させたいから、とのこと。また、多数の父母は家計が大変助かるのでこのｱｲﾃﾞｱに賛成しているとか。なにしろ、この制服は1式そろえても20ﾄﾞﾙ以下しかかかりません。さらに、へそだしなど、学校に相応しくない服装で登校する生徒に対しては予備のｼｬﾂを用意しているという徹底ぶり。しかしそれでも、耳のﾋﾟｱｽや化粧はO.K.で靴や髪型も特に規制はしないそうです。

こんな感じになるんでしょうか…?

注：　制服採用は「個人が選択できる方針」であったこともあり、学校関係者によると、1998年から1999年の一年間のみ適応されたようだ。（大きな輪）

フォレストに関してのお問合せは
直通の098-970-7766渉外官富村まで

フォレストは第20号でフォスターレスターニュースからフォレストへ改名されました。
(1998年発行のため、内容等に変更がありますので、注釈を入れている場合があります)

FEATURED FOLEST CAMP FOSTER and LESTER

Fourth Issue Published in 1998

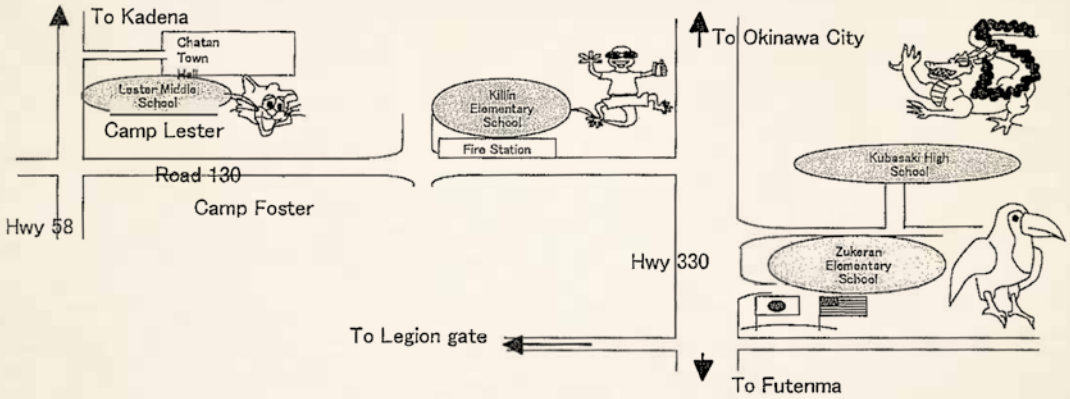
FOLEST is a bilingual newsletter that Hiroko Tomimura, Camps Foster and Lester community relations specialist, has published since 1998. FOLEST is an acronym that combines portions of both the Foster and Lester names. It is distributed to local government offices and several restaurants around Camps Foster and Lester. Big Circle is republishing archived FOLEST to share the information of differences in people's lifestyles on and off base.

Know U.S. Marine Camps near you more! No.4

FOSTER LESTER NEWS

- Time flies, **it's already June!** The word " June" reminds most Japanese of the rainy season and the bridal season. But for American schools, June is the last month of the school year. It is almost same as March in Japan which is very busy month of the year. Also, this is PCS season for many U.S. military personnel. PCS stands for Permanent Change of Station. This year summer vacation of DODDS schools on the island is from 13 Jun to 30 Aug.

- There are four schools on Camp Foster & Lester. There are two Elementary Schools, a Middle school, and a High School (See below). Just like all Japanese schools have their own logo, American schools have their own mascots. For example, Zukeran Elementary's is a bird with big yellow beak. Killin Elementary's is a Gekko, Lester Middle's is a cat, and Kubasaki High's is a dragon. Also, there are on average two Japanese teachers at each school. They teach Japanese language and culture.



- **Uniform in an American school!?** It's true. LMS is implementing a Uniform policy for the next school year. Students must wear Khaki or navy-blue trousers shorts, or skirts, with light blue or white collared polo-style shirts. However, there is a choice which is called "Opt-out", which means not to participate in the program by writing a formal letter to the school. Sounds like Country of Freedom, doesn't it? (It is totally opposite trend from Japanese school. A high school in Naha just started to let students choose what to wear this year!) According to LMS Principal Diane Bell, this is to help students focus on education. Most parents agreed with the idea because the uniform set costs less than $20 which saves them a huge burden. Also, the school even has extra shirts for students who are in improperly attired such as ones showing their belly. But still, it's fine to wear pierced earrings, and make-up plus there are no special shoes, or hair-style.

Note (Update): The uniform policy no longer applies as it was an "Opt-out" policy. According to a school source, it was a short lived policy only in the school year 1998-1999. (Big Circle)

Any questions on FOLEST, contact Ms. Tomimura: 098-970-7766 (direct line)

The name was changed from FOSTER LESTER NEWS to FOLEST on its 20th issue.
(There may be corrections made for the change in contents due to its publication date.)

海兵隊員、希望をのせて、子供たちへエールを送る

南風原町にある沖縄県立南部医療センター・こども医療センターでは日々多くの人が訪れる。しかし、最近ではたくさんの人々が入り口付近にあるガラスの掲示板の前で立ち止まる。彼らは激励や一日も早い回復を願う色とりどりのメッセージがたくさん書かれた三枚のボートを見ているのだ。

Three message boards displayed at the showcase near the entrance of the Okinawa Prefecture Nanbu Child Medical Center.
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター玄関近くのガラスのショーケース内に展示された海兵隊員の応援メッセージ。

コロナ禍の1月28日にキャンプ・フォスター&レスター渉外官の富村浩子さんは、こども医療センターに入院している子供たちを元気づけようと、50人以上が参加した海兵隊員からの応援メッセージを届けた。

しかし、コロナ感染症予防策のために、入館することが出来ず、代わりに医療センターの副院長、チャイルド・ライフ・スペシャリスト、ボランティア・コーディネーター数名が、病院の入り口の外で出迎えた。

チャイルド・ライフ・スペシャリストとして、医療環境にある子ども・家族へ心理社会的支援を行っている佐久川夏実さんは「このメッセージボードのたくさんの言葉は子どもたちやその家族の励みになるでしょう」と、笑顔で話した。

医療センターの子供たちにメッセージを送るという案は、降ってわいたものではなかった。渉外官によると、在沖海兵隊とこども医療センターの交流は2014年夏から始まっていたという。

昨年こそコロナ感染症の影響で交流は行われなかったが、海兵隊員は2015年11月から月に一度子供たちを訪ねていた。一時間ほど滞在し、ゲームをしたり、本を読んだり、子供たちに英語を教えたりして楽しんだ。

「子供たちはとても喜んでいました。特に、2年前に海兵隊員がムーチー（月桃の葉で包んだ沖縄の伝統的な蒸し餅）作りを手伝ってくれた時は本当に助かりました」と佐久川さん。

富村渉外官は、海兵隊員が経験したこの行事を思い出し、「ムーチーの材料を練っただけでしたが、海兵隊員も子供たちもとても楽しそうでした」と振り返った。

そのような交流は新型コロナウイルス感染症のために一年間中断されていたので、富村渉外官は入院している子供たちを励まし、元気づける方法を模索していた。そして、医療センターに何か出来ることはないか尋ね、同センターは海兵隊員の顔写真も一緒の応援メッセージを提案した。

彼女はすぐに行動を起こし、米海兵隊太平洋基地海兵隊バトラー基地本部業務大隊にメールを送った。また、近隣小学校の朝の登校時の横断補助員の海兵隊ボランティアにも子供たちへのメッセージを書くように依頼した。

「全員の写真を集めることは大変でしたが、皆が誠実で心温まるメッセージを書いてくれました」と渉外官。「これらのメッセージが子供たちに届き、子供たちが元気づけられることを心から願っています。」

第3海兵師団第3戦闘兵站連隊本部大隊の在庫管理責任者であるエリック・A・モラニ等軍曹は、小学校で横断補助員のボランティアに参加した一人だが「今まで病院の子供たちに応援メッセージを書いたことは一度もありません。しかし、子供たちに勇気を与えられるような何かを書きたいと思いました」と答え、「私にも子供がいるので、このメッセージを書くときに彼らのことを考えました。『彼らの希望を高めるために何を言うか？彼らにつらい状況を忘れてもらうためには何が言えるか？』を考えました。」

佐久川さんによると、各メッセージボートは最初は子供たちが滞在する3か所の病棟の広場に展示される予定だった。しかし、医療センターを訪れるすべての人々にとっても励みになるメッセージであったため、子供たちの病棟に掲示する前に正面玄関に展示されたそうだ。

文・写真　槙山由江

Marines give messages of hope to children in hospital

A typical day at the Okinawa Prefecture Nanbu Child Medical Center in Haebaru will have an abundant amount of people entering the facility, but recently much of the daily foot traffic has been halted at the doors. This is not due to newly implemented precautionary measures the center has put in place, it is because three large colorful boards filled with numerous messages of encouragement and wishes for speedy recoveries have been put on display at the center.

Hiroko Tomimura, the community relations specialist for Camps Foster and Lester, delivered messages from over 50 Marines to cheer the children up at the medical center during the pandemic Jan. 28.

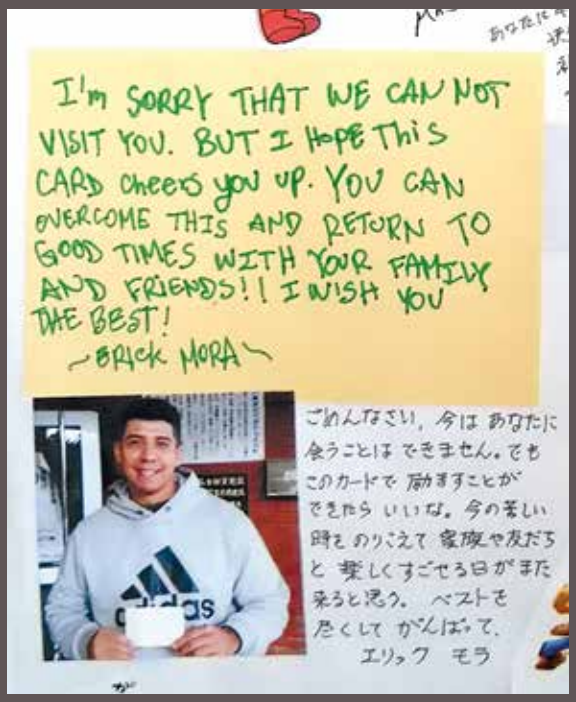
Due to COVID prevention measures, Tomimura was not able to enter the medical center. Instead she was met outside by the vice director, a child-life specialist, a child-support volunteer, along with others who would help display the messages for the children.

"These message boards will surely make the children happy," Natsumi Sakugawa, a child-life specialist who psychologically and socially supports hospitalized children to help reduce stress, said with a big smile.

Sending the children messages did not just happen out of the blue. According to Tomimura, the Marine Corps and the child medical center have had a relationship since summer 2014.

Although they had no interactions last year due to the current pandemic, Marines had visited the children once every month since November 2015. They would stay for an hour playing games, reading books, and teaching the children English.

"The children were so excited. It was especially helpful when Marines supported us making muuchi (an Okinawan traditional steamed rice cake wrapped with shell ginger leaves) two years ago," said Sakugawa.



(Above) Hospital staff and Hiroko Tomimura, community relations specialist for Camps Foster and Lester, smile with the message boards.

メッセージボードを手に笑顔を見せる病院関係者と、キャンプ・フォスター＆レスターの富村浩子基地渉外官。（上）

(Left) Staff Sergeant Erick A. Mora's message.

エリック・A・モラ 二等軍曹の応援メッセージ。（左）

Tomimura recalled this rare but good experience Marines had. "It was just kneading the mixed ingredients for muuchi, but Marines had so much fun with children."

Since such interactions were put off for a year because of COVID-19, Tomimura sought a way to encourage and brighten up the children in the hospital. She asked the medical center and they requested a message board with pictures of the Marines to go with their messages.

Wasting no time, Tomimura took action and sent out emails to Headquarters and Support Battalion, Marine Corps Installations Pacific-Marine Corps Base Camp Butler. She also asked Marine crossing guard volunteers at a neighboring elementary school to write messages for the children.

"It was difficult to get pictures from everyone, but they were all sincere and wrote heartwarming messages," said Tomimura. "I really hope those messages reach the children and cheer them up."

Staff Sergeant Erick A. Mora, inventory management chief of Headquarters Company, Combat Logistics Regiment 3, 3rd Marine Logistics Group, was one of the elementary school crossing guard volunteers and said, "I never wrote cheering messages to children in a hospital but I wanted to write something that would hopefully make them feel good. I have children so I thought about them when writing this. I thought 'what would I say to my child to raise their hopes? What can I say to get them to forget about what is going on?'"

According to Sakugawa, each message board was originally to be displayed in the play area in three locations that children stay. However, since the message boards were so encouraging, the hospital decided to display them at the front entrance before they move them to children's wards.

Story and Photos by Yoshie Makiyama

Earth loving Dragons deepen knowledge with series of events before Earth day

Two months prior to Earth day, April 22, the Environmental Affairs Branch, G-F Facilities of Marine Corps Installations Pacific-Marine Corps Base Camp Butler, teamed up with Kubasaki High School to educate the future generation of Earth residents.

The Environmental Affairs Branch wasted no time when Jillian Eastman, a Kubasaki High School teacher, reached out for assistance with the club activities.

"Earning and keeping the trust of base residents is an important objective for me as director of the Environmental Affairs Branch for the Marine Corps installations here on Okinawa, and outreach efforts are a big part of that," stated David Roen.

He tasked Karen Balabis, the regional environmental training coordinator, with connecting with Eastman and the Environmental Club. Since that initial meeting with Eastman, the following events have been coordinated:

Feb. 8

Paul French, an archeologist and Masayuki Yonaha, the Environmental Affairs Branch archeologist, gave a tour of some recent excavation sites in the Kishaba Housing Area, just outside the school grounds. The students were fascinated by the burial sites that were uncovered, and how these sites are protected and preserved.

They seemed especially interested in a photo that French showed them of local villagers that had come together in 1921 to build a bridge in the exact location where they were standing. Although the stone bridge is long gone, the students could imagine what it must have been like for the entire village to come together to work on a project that would benefit all.

Masayuki Yonaha (farthest end on the right) explains Okinawa burial practices

クラブメンバーに沖縄の埋葬方法を解説する與那覇政之氏（右最奥）。

Feb. 22

Shawn Miller, a nature photographer, presented his efforts to bring global attention to hermit crabs that are forced to use plastic beach trash as protection because of the scarcity of shells. His important research and stunning photos were featured in National Geographic Magazine.

corresponding article on Page 10.

Story and Photo by Karen Balabis

米高校生、地球の日に向けて知識深める

毎年4月22日はアースデイである。その2か月前から、米海兵隊太平洋基地海兵隊バトラー基地施設技術部環境課はキャンプ・フォスター内にあるクバサキ高校と協力して次世代の地球の担い手の知識向上に努めている。

クバサキ高校教論のジリアン・イーストマンさんが顧問を受け持っているクバサキ環境クラブの活動への支援を求めた時、環境課はすぐさま行動を起こした。

デビッド・ローエン環境課長は「基地住民の信頼を獲得し、維持することは、ここ沖縄にある海兵隊施設の環境課の長としての私の重要な責務であり、必要な支援が出来るよう働きかけることは、その大きな部分を占めています」と語った。

ローエン氏は、地域環境研修調整官であるカレン・バラビスさんにイーストマン教論と環境クラブと連絡を取るよう指示した。イーストマン教論との初めての会議以来、たくさんのイベントが調整された。

2月8日

考古学者のポール・フレンチさんと環境課考古学専門員の與那覇政之さんが、学校すぐ側の住宅地内の最近発掘された現場を案内した。生徒たちは、発見された埋葬地と、これらがどのように保護され、保存されているかの説明に聞き入った。

生徒らは、特に、フレンチ氏が見せた自分達が立っているまさにその場所に1921年に橋を架けるために集まった地元の村人たちを写した写真に興味を持っているようだった。石の橋はもう既に跡形もなくなっているが、生徒らは皆に利益をもたらすプロジェクトに村一丸となって取り組んだことだろうと想像をふくらませているようだった。

2月22日

自然写真家のショーン・ミラーさんが、貝殻不足のためプラスチックのゴミを代わりに背負っているヤドカリに世界的な注目を集めようと取り組んでいる彼のプロジェクトを発表した。ミラーさんの重要な研究と素晴らしい写真はナショナルジオグラフィック誌に取り上げられたことがある。

8ページに関連記事記載

文・写真・提供　カレン・バラビス

自然愛好家が基地内高校環境クラブのモチベーションを高める

キャンプフォスターにあるクバサキ高校環境クラブは2月22日、写真家でナチュラリスト、環境保護活動家のショーン・ミラー氏を同クラブ活動の一環として招いた。ミラー氏は沖縄の生物に関心を持ってもらうために自身が行ってきた活動、特にヤドカリを使った環境プロジェクトについて講演した。

クバサキ高校教諭で同クラブ顧問のジリアン・K・イーストマンさんは「私たちは皆、ミラーさんの話を聞くことを楽しみにしていました。講演を聞くことによって生徒たちには、誰もがさまざまな立場で環境活動に参加できるのだということを理解してほしいです」と語った。

ミラー氏は、「浜辺のゴミを住家にするヤドカリ」というプロジェクトを手掛けている。彼がプロジェクトを始めたのは2014年のことだが、2016年に人気写真雑誌サイト「ピーター・ピクセル」に、沖縄の浜辺のゴミにヤドカリが順応しているという記事がミラー氏の写真と共に掲載されたことをきっかけに、このプロジェクトは脚光を浴びることとなった。

「私はずっと沖縄で絶滅危惧種の動物の写真を撮っていたのですが、2010年のある日、撮影のため絶滅危惧種を探索中に、海から3キロほど離れた場所でゴミとして捨てられていた飲み物の蓋を背負ったヤドカリを見つけたのです」とミラー氏は話に真剣に耳を傾ける18名のクラブ会員の学生に語り始めた。

彼はそれを写真に撮って調べた後、「ナショナルジオグラフィック」（世界中の自然、文化、歴史、科学などを紹介する米国の月刊誌）にコンタクトを取り、写真共有サイトに投稿した。その後、同誌からは何の音沙汰もなかったが、ミラー氏は写真撮影の冒険を続けた。

それから4年後、彼は海岸線の生物の記録に力を入れ始めた。ゴミを住家として適応しているヤドカリを、何匹も見つけた彼はゴミであふれる浜辺の自然の中で、そのようなヤドカリを写真に収めていった。

「悲しかったです。圧倒的なゴミの量で、自分にできることはほとんどなかった」とミラー氏は悔しさをにじませた。

しかし、人の価値観を変えたいのであれば、視点を変えなければならないことに気付いたとミラー氏は学生たちに話した。彼は、人々の目に留まることを願って、美しい沖縄の風景を背景に、ゴミに適応したヤドカリの写真を撮りはじめた。

彼の献身的な努力が実を結んだのは2018年のことだった。ナショナルジオグラフィック誌の「地球かプラスチックか（Planet or Plastic?）」という号に柔らかい腹部を守るためにペットボトルのキャップを背負ったヤドカリの彼の写真が掲載されたのだ。

これを期にミラー氏はプロジェクトをさらに拡大するため、ゴミを背負うヤドカリが本物の貝殻へと「引越」するのを後押しする取り組みをはじめた。バケツの中にゴミを背負ったヤドカリと天然の貝殻数個を一緒に入れるのだ。

ミラー氏によると、ヤドカリは通常10分ほどでゴミの殻を脱ぎ捨て天然の殻へ引っ越すという。また、昨年11月からは、貝殻に自分の名前と番号を書いたラベルを貼り始め、このような貝殻を拾った人が不思議に思ってインターネットやソーシャルメディアで調べてくれることを期待した。

彼はヤドカリがかつて背負っていたゴミの数々を学生たちに見せた。また、深海で圧縮された小さな発泡スチロールのコップを見せて、「浜辺には不思議なゴミがたくさん落ちている」と話した。

「ヤドカリ問題は世界中で起きている。」この問題が沖縄だけの問題なのか、それとも他の地域でも起きているのかと質問した学生に、ミラー氏ははっきりと答えた。

また、台湾で同様のヤドカリのプロジェクトをしていた時、現地の友人がいつも貝殻を欲しいと言っていた話をした。ミラー氏は、ヤドカリは自分で殻を見つけることができるものだと思っていたので、正直なところ、その時は真剣に考えていなかったと言う。

◀9ページへ

Shawn Miller shows a hermit crab with beach trash home.
浜辺のゴミを背負ったヤドカリを紹介するショーン・ミラー氏。

Shawn Miller talks to students in Kubasaki High School's environmental club.
クサバキ高校環境クラブの学生に話すショーン・ミラー氏。
Photo by Cpl. Terry Wong / 写真　テリー・ワン伍長

A student reads the name of the new species Shawn Miller found and had named after himself.
ショーン・ミラー氏の名前にちなんだ新種の貝。

example, if one person takes a shell, there are millions of people coming to Okinawa, means millions of people taking shells, hermit crabs cannot compete with it," Miller said.

When students asked him what they can do, Miller told them to go out more to beaches and even forests, to see, to know what is around them. The more they go out and see things around them, the more they know, understand and want to do something about it.

At the end of his speech, Karen Balabis, an environmental training coordinator of the Environmental office branch, G-F facilities, Marine Corps Installations Pacific-Marine Corps Base Butler, who initiated this event, confessed that as a young girl, she once had collected a beautiful shell from a beach. She gave it to Miller saying "I hope this will be a home for a hermit crab someday."

Motivated by Miller's speech, Charity Abanes, Kubasaki Environmental Club co-leader, stated, "learning about his hermit crab shell project and continuing work for environmental preservation definitely inspired our club members to double our efforts against ocean pollution."

Story and Photos by Yoshie Makiyama

(Above) Shawn Miller passes around a compressed Styrofoam cup in the deep sea for showcase.
生徒間で回覧される深海で圧縮された発泡スチロールのコップ。（上）

Shawn Miller shows students trash which once were the homes of hermit crabs.
ヤドカリがかつて背負っていたゴミの数々。

◀8ページから

「でも、多くの人や観光客が貝殻を集めている中で、例えば、一人が一つ貝殻を拾えば、沖縄には何百万人もの人が来ていて、何百万人もの人が貝を拾っていくわけですから、ヤドカリは太刀打ちできないのだと実感しました。」

生徒たちの何ができるかという問いに、ミラー氏は、もっとビーチや森林に出かけて、自分たちの周りにあるものを見たり、知ったりすることだと答えた。外に出て周りを見れば見るほど、多くのことを知り、理解し、何かをしたいと思うようになる。

講演の最後に、この講演の発案者である海兵隊太平洋基地海兵隊バトラー基地環境課の地域環境研修調整官であるカレン・バラビスさんは、幼い頃、浜辺で美しい貝殻を拾ったと打ち明け、「これがいつかヤドカリの住家になると嬉しいです」とミラー氏に渡した。

講演を受けて、クバサキ環境クラブ代表の一人チャリティ・アバネスさんは、「ミラーさんのヤドカリの殻プロジェクトについて学び、環境保全のための継続的な取り組みを知ったことは、間違いなく私たちのクラブメンバーの海洋汚染を防止したいという気持ちをさらに高めたと思います」と話した。

文・写真　槙山由江

A hermit crab resorts to a plastic bottle cap to protect its soft abdomen due to the shortage of the shells. This picture appeared on the issue “Planet or Plastic?” in National Geographic magazine.

貝殻不足のため、やわらかい腹部を守るためにペットボトルのキャップに頼るヤドカリ。この写真は、ナショナルジオグラフィック誌の「Planet or Plastic?」に掲載されたものです。

PHOTO COURTESY BY SHAWN MILLER / 写真提供：ショーン・ミラー

Environmental enthusiast motivates Kubasaki “earth-loving” Dragons

Kubasaki High School’s environmental club on Camp Foster invited photographer, naturalist and environmentalist, Shawn Miller, to talk about his efforts in bringing people's attention to the creatures in Okinawa, especially his trash project with hermit crabs Feb. 22.

“We were all very excited to meet and listen to his speech. I hope the students realize that anyone can take part in environmental action in different capacities,” said Jillian K. Eastman, a Kubasaki High School teacher in charge of the club.

“Crabs With Beach Trash Homes" is the project Miller works on. He started the project in 2014 but it became viral after an article about hermit crabs adapting trash on Okinawa beaches with Miller’s picture of such a crab appeared in PetaPixel, one of the popular photography magazine websites, in 2016.

"I had already been taking pictures of endangered animals in Okinawa, but one day in 2010 while I was exploring endangered species, I saw a hermit crab with a waste cap about three kilometers away from the ocean," said Miller to 18 club members who listened to his speech.

Miller took a photo of it, researched it, contacted National Geographic, and then posted it on the photo sharing site. He heard nothing from them, but continued his photography adventure.

Four years later when he started focusing on documenting animals on the coastline, he found a number of hermit crabs adapting waste as homes and took pictures of them in a natural setting on beaches; piles of trash.

"I was depressed. It was an overwhelming amount of trash and there was little I could do," Miller expressed his frustration.

He told students that he realized that he needed to change the perspective if he wanted to change the values of people. He started taking photos of trash adapted crabs with the beautiful Okinawan scenery, hoping it would catch people's attention.

His hard work and dedication paid off in 2018. After the appearance of his picture of a hermit crab resorting to a plastic bottle cap to protect its soft abdomen on the issue “Planet or Plastic?” in National Geographic magazine, he expanded his project and started to trade out the shells on hermit crabs. He places natural shells in a bucket with a crab with waste.

According to Miller, hermit crabs usually swap the trash shell with the natural one in 10 minutes. He also started labeling the shells with his name and a number in November 2020 in hopes that people who pick up such shells would wonder and look them up on the internet or social media.

He showed students his collection of trash which once were the homes of hermit crabs. He also showed a small Styrofoam cup compressed by the deep sea saying that he can find “a lot of strange trash washed up on the beach.”

“The Hermit crab problem is all over the world. It’s happening all over the world,” Miller emphasized and replied to a student who asked if the problem was just in Okinawa or in other regions as well.

He then gave a story about his friend in Taiwan who used to keep asking Miller to give him shells because they had a similar project with hermit crabs in Taiwan. Miller admitted that he did not take it seriously at that time because he thought crabs can find themselves shells.

“But I realize with all the people and all the tourists collecting shells, for

/11

l in need
d indeed
の友こそ真の友

Nations work together to cleanup, rebuild lives during Operation Tomodachi

April 8, 2011, issue of Okinawa Marine featuring Operation Tomodachi. The newspaper used to be published by the Consolidated Public Affairs Office of Marine Corps Base Camp Smedley D. Butler.
かつて毎週発刊されていた海兵隊広報紙「Okinawa Marine」2011年4月8日号が、「トモダチ作戦」を紹介。

A memorial displayed on Oshima Island, Kesennuma, Japan, March 11, 2021, and was placed by islanders honoring Operation Tomodachi on March 7, 2021.
気仙沼市大島に 2021年3月7日に設置された、トモダチ作戦を称える島民による記念碑。
Photo by Lance Cpl. Alex Fairchild / 写真　アレックス・フェアチャイルド兵長

omodachi

nitarian assistance
y the United States
, 2011 magnitude
truck the northeast
the largest Japan-
ing nearly 25,000 U.S.
with aid efforts across
support of the Japan

発生したマグニチュード9.0
した人道支援・災害救援活動
規模のものとなり、約25,000
災地での支援活動を行った。

Marine Corps Installations Pacific remembers The Great East Japan Earthquake
米海兵隊太平洋基地は東日本大震災を忘れない

On March 11, all U.S. Marine Corps installations in Okinawa flew flags at half-mast to express condolences for the victims of the Great East Japan Earthquake, 130 ft tsunami and nuclear disaster that claimed nearly 20,000 Japanese lives, and had a moment of silence at 2:46 p.m. the time the earthquake occurred and sounded the test Tsunami warning at 3:00 p.m.

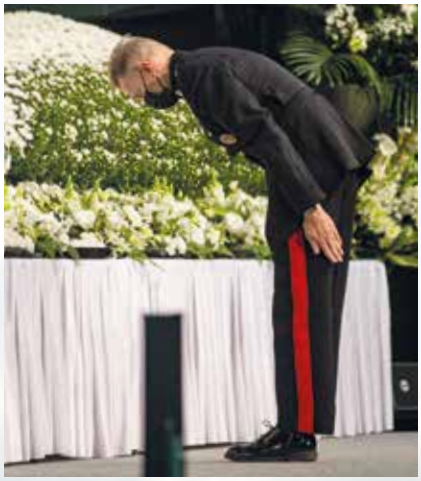
2021年3月11日、在沖海兵隊の全基地では、2万人近くの命を奪った東日本大震災の犠牲者に弔意を表して半旗を掲げ、地震が発生した午後2時46分には黙祷を、午後3時には追悼のサイレンを鳴らした。

Background Photo by Yoshie Makiyama / 背景写真　槙山由江

Spring issue of Big Circle in 2011 featuring Operation Tomodachi.
「大きな輪」2011年春号、「トモダチ作戦」を紹介。

U.S. Marine Corps Brig. Gen. William Bowers, Marine Corps Installations Pacific commanding general, meets with Shigeru Sugawara, the mayor of Kesennuma, at Kesennuma, Japan.
2021年3月11日、気仙沼で気仙沼市長の菅原茂氏と米海兵隊太平洋基地司令官ウィリアム・バワーズ准将。

Photo by Lance Cpl. Alex Fairchild / 写真　アレックス・フェアチャイルド兵長



Brig. Gen. William Bowers bows at the dedication flower bed.
献花台に一礼する米海兵隊太平洋基地司令官ウィリアム・バワーズ准将。

Photo by Lance Cpl. Alex Fairchild
写真　アレックス・フェアチャイルド兵長

(Right) Brig. Gen. William Bowers participates in the 10 year anniversary ceremony of the disaster at Kesennuma, Japan.

2021年3月11日、気仙沼で行われた東日本大震災10周年追悼式に参加する米海兵隊太平洋基地司令官ウィリアム・バワーズ准将。(右)

Photo by Lance Cpl. Alex Fairchild
写真　アレックス・フェアチャイルド兵長

3/

A friend
is a frien
まさかの時の

Operation To

Operation Tomodachi, a huma
and disaster relief launched by
forces following the March 11
9.0 earthquake and tsunami st
coast of Japan, would become
U.S. bilateral operation, involv
service members that assisted
the affected areas of Japan in
Ground Self-Defense Force.

トモダチ作戦は、2011年3月11日に発
の地震と津波を受けて米軍が展開し
で、日米二国間の作戦としては最大
人の米軍人が陸上自衛隊と共に被災

Navy Lt. Youree H. Posey III, the chaplain of Headquarters Battalion, 3rd Marine Division, talks with the director of the shelter.

施設長と会話する第3海兵師団本部大隊牧師のユーリー・H・ポージー3世海軍大尉。

水、衛生用品、そして希望
従軍牧師が、コロナ禍の支援施設に海兵隊員の真心を届ける

2月26日、沖縄市の迷路のような細い道を、ペットボトルの水や衛生用品を山積みにした銀色の車が走り抜けていった。これらの物資は、海兵隊員からの寄付を集めたもので、地域社会で必要な人たちに届けるものだった。

車が目指す場所に到着すると、第3海兵師団本部大隊の牧師、ユーリー・H・ポージー3世海軍大尉が降り立ち、車から水やペーパータオル、洗剤などをシングルマザーとその子供たちのための施設に寄付するために運び始めた。

沖縄市の母子生活支援施設「レインボーハイツ」は、母子のための緊急避難所でもある。そこはポージー大尉の目的地であり、日常消耗品、特に水と衛生用品を必要としていた。

施設長は「多くの子供たちが緊急避難のために来ています。母親たちは、ほとんど何も所持せずに来ています。水と必要最低限の衛生用品が本当に必要なのです」と説明した。

20年近く善行活動で同施設と関わってきたキャンプ・コートニー&マクトリアスの梅原一郎基地渉外官が、施設が必要としているものを伝えたのは1週間ほど前だった。それにも関わらず、ポージー大尉が準備してきたものの多さに渉外官は驚いた。

施設には最大10家族が住むことができる。現在は2人の乳児を含む13人の子供、6家族が入居している。

母子支援員の一人は、「寄付は本当に助かります。季節の行事以外では、家族を支援するための公的資金が限られているので、梅原さんが皆が本当に必要なものは何かと尋ねてくれて本当に助かりました」と感謝した。

支援員によると、水や衛生用品はどの家庭でも必要で、特に乳児を持つ母親は、ミルクを作るために水が大変重宝されるという。施設では日にちを決めて配布しているため、各部屋の限られたスペースに保管する必要がないとのこと。食品の寄付やジュースも喜ばれるが、小さな子供は慣れない食べ物を残す傾向があると説明した。

「今回の寄付には、海兵隊員、船員、その配偶者からの支援がありました」とポージー大尉。「私たちは皆、コロナ禍で何かしらの影響を受けています。肉体的にも、感情的・精神的にも癒しを見つけるために、私たちは困っている人々に救いの手を差し伸べるという自分の役割を果たすよう努めなければなりません。」

寄贈品をすべて置いた後、ポージー大尉は、英語で書かれている一つ一つの品物の説明をした。施設長は「お母さんや子供たちも喜んでくれると思います」と感謝の言葉を述べた。

ポージー大尉によると、レインボーハイツへの支援は今回が初めてではないそうだ。彼は昨年の春にも同施設を訪れて寄付をした。膝をつめてスタッフと話をし、彼らが地域社会や必要としている人々のために行っている途方もない仕事について学んだという。

「私は、ここにいる母親と子供たちに、現在の生活状況に関係なく、大事に思われ、愛されていることを知ってもらいたい」と母子への思いを語った。「彼らが直面する苦難の中にあっても、一人ではないこと、そして希望に向かって進んでいるときには、他の人たちが支えになろうと待っていることを知ってほしいのです。」

文・写真　槙山由江

Bottled water, hygiene items, hope: Chaplain delivers Marines' sincerity to mother, child facility

A silver car loaded with bottled water and hygiene supplies winded its way down a narrow, maze-like road in Okinawa city Feb. 26. These supplies were a collection of donations from Marines to be shared with those in need in the local community.

Once the car reached its destination, Navy Lt. Youree H. Posey, chaplain of Headquarters Battalion, 3rd Marine Division, started unloading water, paper towels, detergent and more to donate to a home for single mothers and their children.

Rainbow Heights, an Okinawa city mother and child-life support facility, and also an emergency shelter for mothers and their children, was Posey's destination and in need of household supplies, especially water and hygiene products.

“A lot of our children are here due to emergencies. The mothers reached here without bringing many items from their home," explained the director of the shelter. "They really need water and basic hygiene products."

Ichiro Umehara, the community relations specialist for Camps Courtney and McTureous who has been involved in good will activities with Rainbow Height almost 20 years, was surprised at the amount of items Posey brought even though Umehara informed Posey the shelter's needed items just a little over a week ago.

The shelter can house up to 10 families. Six families with 13 children including two infants are the current residents.

“The donations really help us. As there are limited public funds available to support the families except the seasonal occasions and Mr. Umehara asked us what we really need for those families,” said a mother and child support staff, “we are really grateful.”

According to the staff, water and hygiene products are used in every family, but mothers with infants especially appreciate the water because they use it to make milk. Facility distributes the supplies on certain days, so families do not need to stick them up in their limited space. She explained in detail that the food donations or juice are also appreciated but small children tend to refuse unfamiliar food.

"For this donation, the support came from a group of Marines, sailors, and spouses," said Posey. "We all have been impacted by this pandemic. In order to find healing at a physical level and an emotional or spiritual level, we must strive to do our part in lending a helping hand to those in need."

After placing all the donation items, Posey explained items one by one since they were all written in English. The director expressed his gratitude saying that the mothers and children sure would appreciate.

According to Posey, this was not his first time providing assistance to Rainbow Heights. He visited them last spring with a few other donations. He sat down and talked with the staff and learned about the tremendous work they are doing for the community and those in need.

"I want those mothers and children to know they are cared for and loved regardless of their current situation in life," expressed Posey. "Through the hardships they face, I desire for them to find that they are not alone in their struggles and others are standing by to offer help as they journey towards hope."

Story and Photos by Yoshie Makiyama

Navy Lt. Youree H. Posey III, the chaplain of Headquarters Battalion, 3rd Marine Division, explains items one by one.

品物を一つ一つ説明する第3海兵師団本部大隊牧師のユーリー・H・ポージー3世海軍大尉。

運命の導き

在沖海兵隊空手家、空手発祥の地、沖縄を愛す

Col. Perry makes closing remarks in Japanese to the people from the local communities at the 38th Camp Schwab/USO Christmas Children's Day in Camp Schwab USO Dec. 7, 2019.

2019年12月7日、キャンプ・シュワブUSO（米国慰問団）で開催された「第38回キャンプ・シュワブ／USOクリスマス・チルドレンズ・デイ」で、地元の人々に日本語で閉会の挨拶をするペリー大佐。

2019年にキャンプ・シュワブで開催されたクリスマスパーティーで、長身の青い目の紳士が、参加した近隣地域住民に日本語で挨拶をしていた。彼の日本語は通訳を必要としないほど流暢で、その立ち居振る舞いは日本人を彷彿とさせるものだった。

この紳士は、現在キャンプ・コートニーにある第3海兵師団の副師団長ジェイソン・S・D・ペリー大佐だ。彼は、2018年にキャンプ・シュワブの第4海兵連隊の指揮官として沖縄に赴任してきた。ブリガムヤング大学で日本語の学士号を取得した後、1994年に海兵隊に入隊。退役海兵隊員の父親も、1960年代のベトナム戦争中に沖縄に駐屯していた。

運命の廻り合わせ

海兵隊の家系とはいえ、ペリー大佐が初めて日本に来たのは海兵隊とは無縁のものだった。彼には日本とのユニークなつながりがある。

1989年、大学を2年間休学した彼は、宣教師として来日した。その間、岐阜県、富山県、愛知県を訪れ、旅をしながら日本語を学んだ。

しかし、彼は日本語をただ単に道中で学んだだけではなかった。ペリー大佐が日本語を学ぼうと思ったのは、それより数年遡る。父親がアメリカで空手の上級指導者だったこともあり、1987年、当時高校生だったペリー大佐はバージニア州で行われた空手合宿に参加し、沖縄出身の儀武息一空手範士の息子と同室となった。

二人の高校生は会話を試みたが、お互いの言語をあまり知らないため、何も話すことができなかった。「本気でやるなら日本語を勉強しないといけない。」ペリー大佐はこのとき、日本語を学ぶことの重要性を痛感したという。

この出来事は、30年近く後に驚くべき出会いにつながっていく。2016年10月23日、那覇市の国際通りで、第6回世界のウチナーンチュ（沖縄にルーツをもつ沖縄県系人）大会が、「空手の日記念演武祭」において空手の「形」の集団演武の数でギネス世界新記録に挑戦したときにそれは訪れた。向かいで演武を披露している人の顔に見覚えがあった。定かではなかったペリー大佐は、その人物に話しかけた。そして、その人物がまさに1987年の空手合宿時のルームメイトだった儀武氏本人であることを確認した。4千人以上の参加者の中で、儀武氏が30年ほど経っても見てすぐわかり、これほど近くで演舞していたのは正に運命的だった。

空手発祥の地沖縄での衝撃的な出会い

ペリー大佐が初めて沖縄を訪れたのは、大学を卒業した1995年、沖縄県指定無形文化財保持者の仲里周五郎氏が運営する那覇市にある沖縄空手道小林流小林館協会の安謝総本部道場での合同稽古に参加した時だった。青年ペリーはこのイベントで通訳兼研修生を務めた。

空手発祥の地にいるという衝撃は、この若き空手愛好家にとって絶好の転機となった。3歳から空手を習っていたが、初めて「空手の世界」を目の当たりにしたのだ。

「空手だけでなく、三線もエイサーも琉球舞踊もすべて沖縄の文化の一部です。アメリカでは、空手はやるものであっても、文化の一部ではありません。」

当時を振り返り、「空手がなぜこのような形になったのかを理解するには、沖縄の歴史、地理、文化、そして生活様式を理解する必要があります

◀17ページへ

Col. Perry enjoys conversation with Futoshi Kohagura (left), Henoko district mayor, and Naomi Miyagi, Toyohira district mayor (not shown), in fluent Japanese.

辺野古区の古波蔵太区長（左）と豊原区の宮城直美区長（写真外）と流暢な日本語で談笑するペリー大佐。

▶Continued from Page 18

when he held the residential district flag and performed Kobudo Eku, he felt strongly that he became more like a "jimoto" (local resident).

"We are outsiders but we are close. We are members of the Henoko community," smiled Perry.

From when he first came to Okinawa as a young Karate enthusiast to the present as a Karate practitioner with the responsibility of holding the residential flag, a mere tourist now became an important part of the community.

His beliefs

Perry, seventh dan (degree) red-and-white belt, respects the idea of being considerate of others before yourself and dedicating yourself to the mastery of one thing over a lifetime. He believes in the concepts of everyday training, work and consistency.

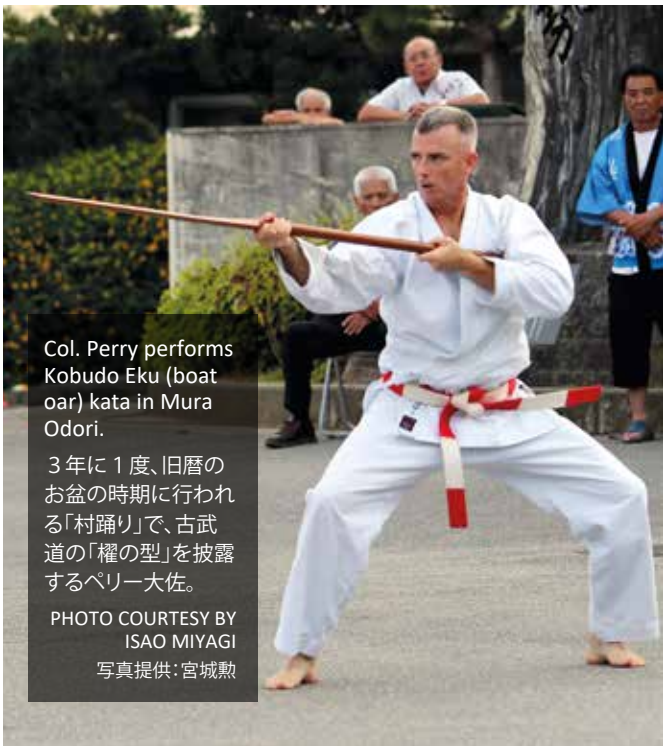
"They are Japanese and Okinawan ideals that I learned from my young age that helped me throughout my life," said Perry.

Okinawan dialect, "Makutu soke nankuru naisa - if you keep making efforts and do the right thing, it will all work out well" is what Perry believes. He sees "chimu gukuru (true heart)" in everyday life in Okinawa.

Story and Photos by Yoshie Makiyama

Col. Perry talks to Kenei Tanahara (left), Kushi district mayor, and Tsuneo Shimabukuro about the pictures in the display.

久志区の棚原憲栄区長（左）と島袋庸雄行政委員長と展示されている写真について話すペリー大佐。



Col. Perry performs Kobudo Eku (boat oar) kata in Mura Odori.

３年に１度、旧暦のお盆の時期に行われる「村踊り」で、古武道の「櫂の型」を披露するペリー大佐。

PHOTO COURTESY BY ISAO MIYAGI

写真提供：宮城勲

Col. Perry plays table tennis with a local child at the 38th Camp Schwab/USO Christmas Children's Day in Camp Schwab USO Dec. 7, 2019.

2019年12月7日、キャンプ・シュワブUSO（米国慰問団）で開催された「第38回キャンプ・シュワブ／USOクリスマス・チルドレンズ・デイ」で、地元の子供と卓球を楽しむペリー大佐。

◀15ページから

す。さまざまな要因が重なって、空手が発展したのです」と言葉を続けた。「このような武道の側面は私にとって興味深いものでした。」

海兵隊員としての日本語向上

海兵隊に入隊してから、ペリー大佐は日本に来る機会に何度もめぐまれた。最初のチャンスは2000年に横浜で、米国国務省日本語研修所で1年間上級日本語を学んだ時だった。2004年から2007年までは、米国政策担当国防次官付の日本部長を務めた。

2007年から2014年の間には、6か月交換で行われる部隊展開配置プログラムのローテーションで沖縄にも何度か来た。また、2015年には日本防衛研究所への留学生として海兵隊から選出された。ペリー大佐によると、当時研修していた50人のうち外国人は6人だけで、授業はすべて日本語で行われたという。

噂の師範との出会い

キャンプ・ハンセンに駐留していた大尉時代のペリー大佐は、ある時、父の友人である元海兵隊員からずっと話を聞かされていた空手家を訪ねた。事前に連絡したわけではなかったが、少林流範士の島袋永三氏は、この海兵隊員の空手愛好家を快く自宅に迎え入れた。2時間ほど話をした後、師範に空手の稽古の指導をお願いしたが、島袋氏は断りつつも、「また来なさい」と言った。

再び訪問し、また2時間ほど話をした。しかし、ペリー大佐はこの時は範士の弟子になりたいとは伝えなかった。三度目の訪問で、島袋氏は彼を道場に招いた。道場は美しく、偉大な師範たちの写真が飾られ、すべての稽古用具が揃った典型的な沖縄の道場であったと少年のように目を輝かせてペリー大佐は語った。

「島袋永三先生の下で一年間修行できたことは、私にとってとても素晴らしい経験でした。」

地域社会の重要な一員となる

キャンプ・シュワブの基地司令官を務めていた頃は、地域住民との交流を楽しんだ。キャンプ・シュワブは名護市辺野古区の11番目の居住班と認識されており、ペリー大佐は居住班の11班の班長を務めた。彼は、辺野古青年会の特別演武者として、3年に1度、旧暦のお盆の時期に行われる「村踊り」で、古武道の「櫂の型」を披露した。ハーレー（爬龍船競漕）や沖縄角力（相撲）にも参加した。

キャンプ・シュワブの基地渉外官の伊波文雄さんは「伝統芸能を次の世代に伝える行事に外国人が招かれて、演武を披露したのは後にも先にもペリー大佐ただ一人です」と感慨深げに話した。

伊波氏によると、「村踊り」は受け継がれてきた組踊や狂言を披露して五穀豊穣に感謝する行事で、踊る前に、青年会の棒術が行われるという。

「村踊りに参加できたことは、私にとって非常に特別なことでした」と振り返った。ペリー大佐は、流暢な日本語が話せるとはいえ、日本人の中では部外者のように感じるという。しかし、第11班の班旗を持ち、古武道の「櫂の型」を披露したとき、「地元」（地元住民）に近づいたように強く感じたそうだ。

「私たちは部外者ですが、近い存在です。私達は辺野古社会の一員です」と笑った。

空手愛好家として沖縄に来た一介の観光客だったペリー大佐は、今では空手師範となり、キャンプ・シュワブ基地司令官として辺野古区第11班の班旗を持つ、地域の重要な一員とまでなったのだ。

彼が信じるもの

現在、紅白帯教士七段のペリー大佐は、自分よりも先に他人を思いやり、生涯にわたって一つのことを極めることに専念するという考えを尊重している。日頃の鍛錬、仕事、一貫性という概念を信じている。

「これらは私が幼い頃から学んだ日本や沖縄の理想であり、私の人生をこれまで支えてくれたものです。」

沖縄の方言である「まくとぅーそーけーなんくるないさー（努力し続けて正しいことをすれば、すべてうまくいく、本人解釈）」という言葉を、信じている。彼は沖縄の日常生活の中に「チムグクル（真心）」を見出すという。

文・写真　槙山由江

▶Continued from Page 20

Improving Japanese as a Marine

Once in the Marine Corps, he had many opportunities to come to Japan. The first chance came in 2000 while in Yokohama where he studied advanced Japanese at the Foreign Service Institute in Japan for a year. In 2004 to 2007, Perry served as the country director for Japan in the Office of the Under Secretary of Defense for Policy.

From 2007 to 2015, Perry came to Okinawa several times as part of the unit deployment program. In 2015 he was selected to study at the Japan National Institute for Defense Studies. According to Perry, out of 50 people, only six were non-Japanese and the classes were conducted in Japanese.

Meeting a lifelong rumored Karate master in Okinawa

At one point as a captain stationed at Camp Hansen, Perry visited a Karate teacher who he heard of his entire life from his father's friend, a former Marine. Although Perry had not contacted him ahead of time, the karate teacher, Eizo Shimabukuro of Shobayashi Ryu, welcomed the Marine karate enthusiast into his house. They talked for two hours and the Marine asked to train with the teacher. Shimabukuro said no but told him to visit again.

Perry visited again, talked another two hours, but did not ask to be the instructor’s disciple. On his third visit, Shimabukuro invited him to the dojo. Perry recalled his eyes shining like those of a young boy and said that the dojo was beautiful and was the typical Okinawan dojo with all the equipment and pictures of great predecessors.

"I had a great privilege of training under Shimabuku(ro) Eizo sensei for a year," said Perry.

Becoming an important part of the community

During his time as camp commander of Camp Schwab, Perry enjoyed the interactions with the local residents. Since Camp Schwab is recognized as the 11th residential section of Henoko, Nago, he was the section leader. Perry performed Kobudo Eku (oar) kata as a special demonstrator of the Henoko Youth Association at Mura Odori (village dance), the event residents hold every three years around Obon of the lunar calendar. He also participated in the Harii (dragon boat race), Kaku Riki (Okinawan sumo).

“Col. Perry is the only foreigner ever to be invited to perform at an event where traditional performing arts are handed on to the next generation," said Fumio Iha, the community relations specialist of Camp Schwab.

According to Iha, Mura Odori is an important event in Henoko in which residents show their gratitude to the good harvest by performing the traditional Kumi-odori and Kyougen dances to pass down traditions to the younger generations. Before the dances, a boujyutu (stick fighting) demonstration is held by the youth association.

"It was very special to me to participate in the Mura Odori," recalled Perry, who still feels like an outsider among Japanese, even though he speaks fluent Japanese. However,

Continued on Page 16 ▶

Col. Jason Perry, then the commanding officer of 4th Marine Regiment, speaks to the Marines of 3rd Battalion, 6th Marine Regiment, assigned to 4th Marine Regiment, 3rd Marine Division under the Unit Deployment Program, during Exercise Fuji Viper, at Combined Arms Training Center Camp Fuji, June 12, 2019.

2019年6月12日、キャンプ富士諸職種共同訓練センターで行われた演習フジ・ヴァイパーで、部隊展開配置プログラムに基づいて第3海兵師団の第4海兵連隊に配属された第6海兵連隊第3大隊の海兵隊員に話しかける第4海兵連隊司令官のジェイソン・ペリー大佐（当時）。

Photo by Lance Cpl. Joshua Sechser
写真　ジョシュア・セッシャー一兵長

Translation:

Karate is not for an attack
(If you hit no one, no one hits you, and there is no battle.)
Thank you for protecting us.

Henoko district Mayor
All the Henoko district residents

Col. Perry performs Kobudo Eku (boat oar) kata in Mura Odori. **The residents of Henoko district presented this picture in the frame to Col. Perry to express their gratitude.**

３年に１度、旧暦のお盆の時期に行われる「村踊り」で、古武道の「櫂の型」を披露するペリー大佐。**辺野古区住民がペリー大佐に感謝の気持ちを込めてこの写真を額縁に入れ贈呈。**

PHOTO COURTESY BY
ISAO MIYAGI
写真提供：宮城勲

Guided by fate: Marine Karate practitioner respects Okinawa, the root of Karate

At a Christmas party held at Camp Schwab in 2019, a tall blue-eye gentleman greeted the guests from the neighboring communities in fluent Japanese. His Japanese was so good that he needed no translator and his demeanor was reminiscent of a Japanese native.

This gentleman was Col. Jason S. D. Perry, the current assistant division commander of 3rd Marine Division at Camp Courtney. He most recently came to Okinawa in 2018 as the commanding officer of 4th Marine Regiment at Camp Schwab.

He joined the Marine Corps in 1994 after graduating from Brigham Young University with a Bachelor of Arts degree in Japanese. His father is also a retired Marine who was in Okinawa in the 1960s during the Vietnam War.

Col. Jason Perry, then the commanding officer of 4th Marine Regiment, speaks to the Marines during Exercise Fuji Viper, at Combined Arms Training Center Camp Fuji, June 12, 2019.

2019年6月12日、キャンプ富士諸職種共同訓練センターで行われた演習フジ・ヴァイパーで、海兵隊員に話しかける第4海兵連隊司令官のジェイソン・ペリー大佐（当時）。

Photo by Lance Cpl. Joshua Sechser / 写真　ジョシュア・セッシャー兵長

Fate fell upon him

Even though from a Marine family, Perry's first time in Japan had nothing to do with the Marine Corps. He has a unique history with Japan.

In 1989, he took a two-year break from his university and came to Japan as a missionary. During this time, he visited Gifu, Toyama and Aichi Prefectures, learning Japanese as he travelled.

However, his Japanese was not just learned along the way. Perry's interest in learning Japanese rose a few years prior. With his father being a senior instructor of Karate in the U.S., Perry, a high school student then, attended a Karate camp in Virginia 1987 when he shared a room with another teen, the son of Sokuichi Gibu, a high ranking Karate teacher from Okinawa.

The two high school boys tried to communicate, but with not knowing much of each other's languages, they were unable to say anything. "If I want to take this seriously, I need to learn Japanese." Perry said it was then he realized the importance of learning Japanese.

This event in his early life would lead to an amazing encounter nearly 30 years later. When the 6th Worldwide Uchinanchu (native to Okinawa) Festival tried to set the Guinness World Record for Most People Performing a Kata on Kokusai Street, Naha, Oct. 23, 2016, he saw a familiar face performing kata across from him. Being unsure, Perry talked to this person and confirmed that it was Gibu, his roommate from the Karate camp in 1987. Of the over 4,000 participants, it was fate that Gibu was performing so close to him that he could see and recognize him some 30 years afterwards.

Stunning encounter in Okinawa, the root of Karate

Perry's first time in Okinawa was actually in 1995 after graduating from BYU. He went to a joint Karate training at the Aja headquarters dojo of Shorin Ryu Shorinkan Kyokai, in Naha. It was run by Shugoro Nakazato, who was designated as the holder of the Okinawa Prefectures Intangible Cultural Property. Young Perry was a translator and trainee at the event.

The impact of being in the birthplace of Karate was a turning point to this young Karate enthusiast. He saw the world of Karate for the first time even though he had been learning Karate since he was three years old.

"To see, not just Karate, but Sanshin, Eisa (drum dance), and Ryukyu Buyo (Okinawan dance), all those things are part of Okinawan culture. In America, Karate is something you do, but not part of the culture," Perry said.

"To understand why Karate is the way it is, you understand the history, geography, culture and the lifestyle (of Okinawa). The number of different factors developed Karate," continued Perry. "The aspect of the martial arts was interesting to me."

Continued on Page 18 ▶

Big Circle
大きな輪

Big Circle is an authorized publication of the United States Marine Corps. However, the contents of Big Circle are not necessarily official views of, or endorsed by, the Marine Corps, U.S. Government, or Department of Defense. It is published quarterly by Communication Strategy and Operations, Marine Corps Installations Pacific. Big Circle is on the Web at **https://www.dvidshub.net/publication/1184/the-big-circle.**

E-mail subscriptions to this publication are available online by subscribing via https://www.dvidshub.net/publication/1184/the-big-circle. Subscribers will receive an e-mail when the latest issue has been published on the Web. The publication can be viewed in PDF format online or downloaded.

「大きな輪」は、米国海兵隊認可の機関誌です。ただし、「大きな輪」の内容は、必ずしも海兵隊や米国政府、米国防総省の公式見解であるとは限りません。当機関誌はキャンプ・バトラー米海兵隊太平洋基地広報企画運用部（COMMSTRAT）が3ヶ月ごとに発行しています。大きな輪のウェブアドレスは **https://www.dvidshub.net/publication/1184/the-big-circle**.

当機関誌ウェブ版をご希望の方は、上記ウェブサイトに購読をお申し込みください。お申し込みされた方は、ウェブ上に新刊が掲載されると、通知メールを受信するようになっています。ウェブ版はPDF形式で、インターネットで閲覧、またはダウンロードすることができます。

Commanding General
Brig. Gen. William J. Bowers

Communication Strategy and Operations Director
Lt. Col. Matthew H. Hilton

Communication Strategy and Operations Deputy Director
1st Lt. Timothy A. Hayes

Managing Editor
Yoshie Makiyama

Editorial Support
Toshiyuki Nakamoto
Matthew J. Manning
Megumi Handa

International phone
011-81-98-970-1220

International fax
011-81-98-970-3803

Mailing Address
MCB Camp S.D. Butler
Bldg. #1, COMMSTRAT
Unit 35001
FPO AP 96373-5001

Phone
(098) 970-1220

FAX
(098) 970-3803

Email
okinawa.mcbb.fct@usmc.mil

◇◇◇

New Year Cleanup
新年清掃活動

Members of the U.S. military community pose for a group photo after an American Village cleanup in Mihama, Okinawa, Japan Jan. 16, 2021.
清掃活動後、集合写真のためにポーズ するボランティア参加者＝2021年１月16日、北谷町美浜 (Photo by Cpl. Ryan Pulliam)

contents

20 Story of Col. Jason Perry (Assistant Division Commander of 3rd MARDIV)

Guided by fate

14 Helping hands

The chaplain delivers water, household supplies, and hope

12 3/11 - Tribute to the victims of the Great East Japan Earthquake

Quick look-back of then and now

10 Kubasaki High School Environmental Club students raise awareness of Okinawa environment

Shawn Miller, photographer, naturalist and environmentalist, showcases his project

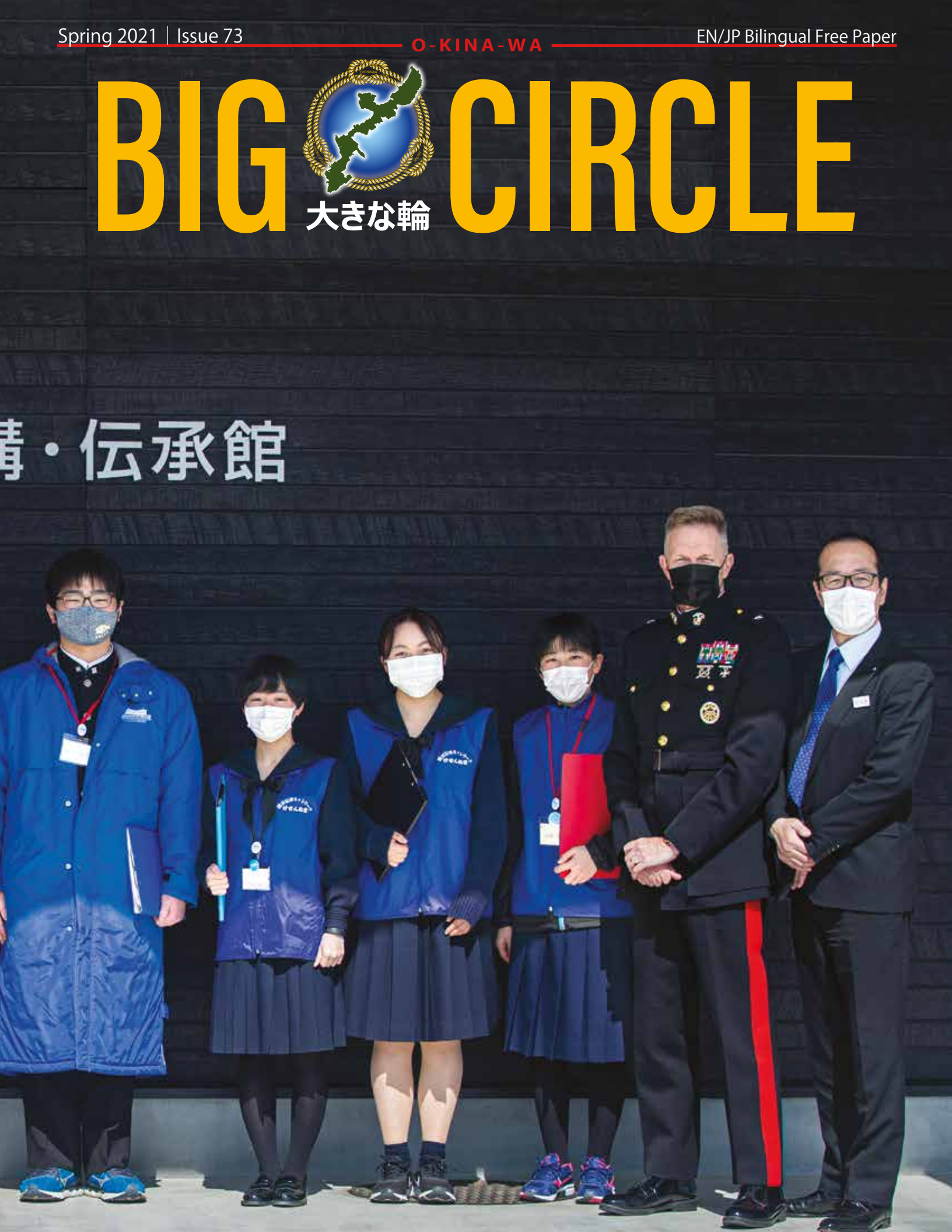
7 Environmental Club students deepen knowledge before Earth day

6 Encouraging messages give hope to children in hospital

4 Featured FOLEST

Looking back at the newsletter Camps Foster & Lester community relations published in 1998

2 Reader's Voice/Correction

Spring 2021 | Issue 73
O-KINA-WA
EN/JP Bilingual Free Paper

BIG CIRCLE 大きな輪